

「楽習」コラム

内田伸子先生からの
子育て応援メッセージ

「こんなに大事だった！
子どもの遊び」編

子どもが子どもでいられる時間は
長いようで、とてもみじかいものです。
「いい親」になろうとがんばりすぎず、焦らず、
お子さんと一緒に1歩ずつ、
楽しみながら進んでください。

(内田伸子先生著書『子育てに「もう遅い」はありません』より)

「たのしく・あそぶ・まなぶ・そだつ」「楽習」
今号では子どもの「遊び」を徹底解剖。
遊びから生まれるさまざまな力、
遊びがいかに大切なのかを、
内田先生に教えていただきます。

「ままごと」が コミュニケーション力を 育てる

子どもは1歳半くらいで、お
もちゃのお茶碗にご飯を入れて
食べるまねや、おもちゃの茶器
でお茶を入れて飲むようなしぐ
さをすることがあります。これ
が「こっこ遊び」のはじまりです。
大人のしていることを観察して、
その動作をまねします。「お茶
を入れる↓お茶を飲む」という
流れを作りだしています。この
とき、想像力が養われるのです。
こっこ遊びをするようになると、
紙を丸めてお皿に並べて大人
に「ハイ」と渡すときもありま
す。大人は「あら、おいしそう
ね」とそれを受け取り、「パクパ
ク」と食べるふりをすると、子ど
もも満足します。子どもは大人
がどんな対応をするのかも想像
しているのです。子どもは喜ん
で、何度も紙のお団子を勧める
でしょう。大人が関わることで、
どんな世界が広がります。

2歳半ころになると、こっこ
遊びがさらに発展していきます。
それまでは「お茶を入れる」とい
うひとつの動作を繰り返してい
たのが、「お客さんが来たとき」

という場面を設定して、その流
れの中で「お茶を入れて勧める」
という動作が出てきます。

やがて友だちと一緒に同じ世
界を共有できるようになると、
お父さん、お母さんなどの役割
が生まれて、子どもが何を演じ
るのかをはっきりと意識するよ
うになります。これがままごと
遊びです。

ままごとはひとりではできま
せん。親しい友だちと即興で会
話を作り出し、時には話の進行
に食い違いがあつてケンカをし
たりしながら、まさにコミュニ
ケーションの基本を身につけて
いくのです。

このように何げなくしている
ように思われるこっこ遊びも、
想像力を育むのに大切な役割
を担っています。そして、想像
力が広がると人との関わり方も
考えられるようになり、コミュニ
ケーション能力も育ちます。
子どもにとっては遊びが何より
も大切だということが、わかる
のではないのでしょうか。

「泥んこ遊び」で 想像力豊かな子に

最近、砂場が汚いから遊ばせ
たくないという親御さんが増え

ているようですが、子どもは少々
のことでは病気にはなりません。
子どものころから体を汚さない
ような遊びばかりしていると、
それこそさまざまな菌に対する
抵抗力がでないのではないかと
思います。遊んだ後にうがい
をし、きれいに手と足を洗えば
大丈夫でしょう。

子どもはとても感覚がするど
く、体を受けるさまざまな感覚
や刺激から、多くのことを学ん
でいます。

特に土や砂、水などは身近に
あつて、手で感じられるすばら
しい材料です。砂でお山を作っ
て水で固めて、時には水をかけ
すぎて山が崩れてしまうでしょ
う。そんな失敗のあとに高い山
を作れたら、大喜びです。さら
には山にトンネルを掘っておも
ちゃの車を走らせてみたり、穴
を掘ってダムや池をこしらえて
水を入れたりと、さらに新しい
遊びへと発展していきます。想
像力をフル回転させながら遊ん
でいるのです。

泥んこになつて遊べるのはほ
んのわずかな期間なので、周り
の大人は顔をしかめたりせず、
「いっぱい遊んだねえ」と声をか
けてあげてほしいものです。
もし、子どもが泥だんごを作っ

お話をお聞きしたのは

内田伸子先生

十文字女子大学理事。同大
学特任教授。お茶の水女子大
学名誉教授。発達心理学、認
知心理学、保育学を専門とす
る。著書に『子育てに「もう遅
い」はありません』（富士房イ
ンターナショナル）など多数。



て「ハイ」と差し出したら、「いただきます」と受け取りましよう。

「このおだんごにはあんこが入っているのね」などと言ってみてください。

「これはクリームが入っているの」「これはきなこがかかっているよ」と、次々想像の世界が広がっていくでしょう。

子どもは毎日「発想」の実験日！

遊びというと、大人はつい、おもちゃで遊ばせることを考えてしまいがちです。おもちゃを与えれば子どもは興味をもち、上手に遊んでくれると思ってしまう。しかしながら、せっかく買ったおもちゃには見向きもせず、ティッシュペーパーを箱から次々にぬいて大喜びする子どももいます。

子どもにとっては身の回りのものすべてが「おもちゃ」です。わざわざおもちゃを買い与えなくても、子どもは遊びを発見する天才です。「遊ぼう」と身構えるのではなく、大人は子どもがしていることに合わせてあげるだけでいいでしょう。

1歳を過ぎたころから、過去

に経験したことを頭の中で思い浮かべるようになります。例えば、空き箱を「ブーブー」と言いながら動かしているときは、頭の中では自動車を思い浮かべています。こうした遊びは、子どもの豊かな「発想」のもとになっていきます。

このとき、周りの大人が「この子は車が好きなんだ」と車のおもちゃを次々に買い与えると、発想の芽を摘む原因になります。何もないところから何かを生み出す、そのプロセスはとても大切で、大人も一緒に空き箱を使って遊んであげましょう。

子どもが自分から取り組んで、一生懸命に遊んでいるときは、途中でやめさせたりしないで、満足するまで体験させてあげましょう。満足するまでたっぷり遊べたら、子どもは次へ進みます。遊びの中にも子どもが成長するステップが含まれているのです。

子どもにとっては、毎日が「発想」の実験日で、次々と遊びを発明していきます。お母さんやお父さんは「待つ、見守る、急がない、急がせない」を心がけて温かく見守り、子どもの興味を共有してみたら、一緒に楽しい時を過ごせると思います。

子どもにとって遊びは生活そのものであり、自分を表現する方法です。自分でするから楽しいのでしょし、その楽しさのもとになるのは自分の内から湧き出てくる好奇心でしょう。

積み木を買ってあげても、横一列に並べたり、カチカチ打ち鳴らしたりして、本来の使い方とはまったく違う遊びをする子どももいます。それでも、すでに遊びは始まっています。ここで大人が「積み木は積んで遊ぶもの」と教えてしまつと好奇心が薄れてしまいます。積み木は知育にいいといわれているので、「豊かな発想をもつ子に、手先が器用な子にしたい」と買い与える親御さんもうるでしょうが、それはあとからついてくるようなものです。最初に「目的ありき」では、それこそ子どもの自由な発想を奪つことになりかねません。この時期に型にはめてしまつと、柔軟な発想ができなくなってしまうのです。

やがて、積み木をひとつずつ積んでいくおもしろさに気づくでしょうし、「高い塔を作ろう」と真剣に取り組むようになります。おもちゃを与えたら、あとは自由な発想に任せましょう。もし積み木を投げつけたりし

たときは、「人に当たったら痛いから、ポンしないでね」ときちんと言い聞かせれば、わかってくれるはず。

お気に入りの遊びで「集中力」がつく

おもちゃで遊んでいてもすぐに飽きてしまつ、次々に違うおもちゃで遊んでいる……こうした光景を見ると、「集中力がないのでは？」と心配になる親御さんもうるでしょう。

1歳前後の子どもは、ひとつのものにじっくりと取り組むのはまだ無理のようです。ひとつに集中できないから、他に目移りしてしまうのです。子どもとはそういうものですから、あまり気にする必要はないでしょう。子どもはひとつのお気に入りのものが見つかると、飽きずに遊んでいます。ラップの芯やペットボトルが大のお気に入りの子どもは、そこらじゅうをポンポン叩いて遊んだり、転がしたりして喜んでいきます。そういうときは「こんなもので遊ばないで」と取り上げたりせず、気が済むまで遊ばせてあげましょう。限られたおもちゃから新しい遊びを考えるのは発想力を養う

チャンスですし、集中力も高まります。今ある素材を上手に活かして、子どもの集中力を少しずつつけていきましょう。

子ども同士の遊びは「社会体験」

子どもはさまざまな経験を積み重ねて、知識を自分のものにしていきます。子どもの頭の中にある体験や知識は、一つひとつがバラバラで、ちようど海に点々と浮かんでいる島のようにです。ずっと同じ体験を続けていると、その島はバラバラのまま。今までと違う体験を重ねること、その島と島の間はつながって子ども同士の世界が作られていくのです。

島をつなげるためにも、年齢の近い友だちとの遊びは重要です。同じような年齢の友だちと遊ぶ中で、自分とは違う欲求を持つ他者とぶつかり、相手の気持ちかわかったり、自分の言いが通らず悔しい思いをしたり、互いに助け合ったり、子ども同士で遊びのルールを作るかもしれない。そうやって、人との付き合い方や自分自身をコントロールすることができるようになっていくのです。また、仲

間と遊びながら「あの子は大きいけど、ボクは小さい」「でも、ボクのほうが早く走れる」など、自分と他の子の違いに気づくチャンスもあるでしょう。自分と人とは違うことに気づき、受け入れるところから子どもは大きく成長していきます。

実は3歳から4歳にかけての遊びは、将来、社会になじめるか・なじめないかという点に影響しているといわれています。3〜4歳頃はとかく自己中心的でお友だちとうまく関われないことも多いのです。おもちゃを独り占めしているときなど、親御さんが仲立ちをしてあげ、お友だちに貸してあげるよう促したり、おもちゃを貸してもらったときには「ありがとう」と言葉をかけてたりして一緒に遊べるよう、親御さんが仲立ちをしてあげてください。5歳頃からお友だちの気持ちもわかるようになるので、自分勝手な欲求を抑え、がまんすることもできるようになります。お友だちと遊ぶ楽しさが味わえるようになり、仲間意識も育っていくでしょう。遊びの中で状況を判断し、友だちと関わる経験が、大人になって社会に出たときの行動の基礎となっていくのです。

次号予告

「子どもの脳の育ち」についてです。どうぞお楽しみに。